

六点

②着ぶくれて相槌すこしづつずれる

恩田 才美

約束の一日外歩き、寒い朝でした。天気予報のアドバイス通りしつかり着込んで外出。ご想像通り女同士の会話は、自分の話しばかりに夢中で、相手の話には無とんじやく。けれど結末はしつかり合っていて、落語のオチみたいですね。しかし、着ぶくれていると、身体的には本来の自分でないようなにぶさが、微妙な時間差での会話となってくる。帰りの車中、束の間、自分を客観的に見つめていた。

寒三日月砕氷船の深き傷

藤崎安紀子

船橋港に停泊している南極船「しらせ」の見学をしました。元南極隊員の方の案内で船内での生活の過酷さを知り、又、「しらせ」の船体に砕氷船の傷跡がくつきり見てとれました。その傷跡は、まるで寒空をえぐったごとき三ヶ月のようでした。この句には、冬の季語が重なっていて冒険でした。「砕氷船」を「南極船」に代えればいいだけの事ですが、このえぐれた傷跡のきびしさをクリアに表現するために、あえて「砕氷船」を使いたいと思ったのですが、これでよかったですでしょうか？ 自問自答しています。

五点

③寒木の影の刻印揺るぎなし

増田 守

冬は「玄冬」と形容される。玄即ち黒。冬の象徴の色は黒ということである。俳句では対象から得た感動を、言葉で表現する。でも、「冬の木が黒い」と言ったのでは、ごく普通の表現である。作者は、「影の刻印」という表現を選択して、「寒木」を表現しようとした。

②九条を守る署名や寒の街

藤本 友子

寒中のある日、駅頭で主婦らしきグループの署名活動に出会いました。それは、憲法九条の改憲に反対する署名でした。このような一般市民の粘り強い活動が、平和を守ることにつながるのだと実感し、私も署名しました。戦争に向かっていくような不安な世相を、「寒の街」で表現しました。

①狐火に貯金通帳のぞかるる

恩田 才美

「見てきたように嘘を」とは？ イソップの狐のように少し賢く、又、抜け目なくそして懐しい誰某になぞらえての狐火。私の貯金くらいならのぞかせてもいいかと。

福という一文字の絵馬初大師

稲葉 幸

精神障害を患っている私の友人の息子。二十一日がお大師様の日で、月参りしています。最近、一月に川崎大師へ久しぶりに行きました。私よりも先に友人が、この絵馬に目がいきました。五十歳近い息子に頭が痛いと思いますが、「私の育て方が悪かった」と話しています。

山頂に潤ほす喉や寒の水

藤本 友子

これまで未経験の山登りを、昨年から始めました。ハイキング程度の低山でも、山頂に到着した時の達成感は、すばらしいものです。山頂からの風景を眺めつつ飲む水は、体に沁みわたります。寒の最中でしたので、「寒の水」としました。

餌にむれし雀一列初日記

佐渡谷秀一

昨年九月に亡くなった義母の毎朝の仕事は、雀のために庭に向かって米を撒くことだった。葬儀が終わってから、私も真似をして、朝刊を取り込んでから、芝生一面に米を撒いている。現在、冬の真最中のせいかな、あの頃の倍の二十数羽の雀が集まってくる。それが必ず一列横隊となって啄むのである。雀が毎朝、啄む米の量は、私の一日の消費量程だろうか。一人住いの一寸した楽しみとなっている。

四点

①二万歩や地図を片手の福詣

藤本 友子

今年は、藤沢七福神に詣でました。藤沢本町の駅でもらった地図とスタンプ用のパンフレットを持つてのお参りはかなりの距離です。最後の江の島弁財天に行く時は、強風に阻まれ、高波が橋桁に当たる水しぶきを避けながらの、大変な苦行となりました。巡り終えての歩数は、二万五千歩近くで、少々疲れました。

①凍雲やどこへ向かうかこの地球

藤崎安紀子

昨今の天変地異の激化は著しく、又、北朝鮮の問題など、世界情勢も危うくなり、この先地球はどうなっているのだろうか。誰もが不安に思っているのではないだろうか。激しい雪や雨や、はたまたミサイルが降ってくるかもしれない空を見上げるとそこには凍りついたような雲が！ 益々不安が増強してしまいました。

ブリュウゲルの村となりぬる雪の朝

柏尾のり子

ずい分前にブリュウゲル展に行ったことがあります。大きな絵画ですが、細密な描写で物語性のある人物や建物が描いてあり、興味深く見えました。その中でも雪景色の中で狩りをしている人々を描いたものが印象に残っています。先日の朝、カーテンを開けた途端、眼下の（我が家は八階）住宅街や空き地がすっぽり雪におおわれているのが目に飛び込み、「あ、ブリュウゲルだ」と思わず言ってしまいました。それを、五・七・五に収めてみました。

状差へ戻す絵葉書年惜しむ

佐渡谷秀一

手紙、葉書、医者への領収書などでパンパンになっている状差しを年末に整理する。殆んどは処分することになるが、幾分か残ることになる。そのうちに、絵画、彫刻（仏像）の絵葉書がある。別途、整理保管する知恵もなく、再び元へ戻しておくことになる。気に入った絵葉書をあらためて眺めるのも気分のおいものである。

宿題が終わらないのは、気が重いものである。頭の隅から離れない、いくつかの宿題。お墓をどうするのかも、そのうちの一つである。ああでもない、こうでもないと考えているうちに、世間では、お墓仕舞いする方々も増えていると言う。お墓は必要なのか、不要なのか？ 自分は、どういう選択をするのか？ 未だ、答えが出せないでいるのだが、思案を始めると、いささか、憂鬱となり、そういう時は、ついついコーヒーの杯を重ねてしまうのである。コーヒーには、わずかに、カフェインが含まれており、カフェインのせいかどうか、分からないが、コーヒーを飲むと、何やら、少し、高揚するような気がするのである。コーヒー依存症なるものが、存在するのかどうか、分からないのであるが、コーヒーの飲用を控えようとしても、三日と続かなかったのである。

独り居の小さく豆まく鬼は外

荒木ツル子

この日は、独りなつた今でも私の行事です。ちよつと恥ずかしく小声で鬼は外と豆を撒くのです。翌朝、庭に鳩が数羽来ていました。幸せを持って。